

## JACET 北海道支部での思い出

高井 収

JACET 支部紀要 RBET 刊行 10 周年、おめでとうございます。

振り返ってみると、JACET 北海道支部では専門の英語教育の研究の他にも、多くの事を学ばせて頂いた。また、平成 22 年～24 年にかけて支部長に選任され、無事、その任期を務めることが出来た。これも、多くの皆様のご協力の賜物だと深く感謝申し上げます。

今、一番思い出としてよみがえってくるのは私が副支部長の時、第 48 回 JACET 全国大会が北海学園大学で行われ、平成 21 年 9 月 5 日、懇親会の席で「江差追分」（英語の字幕、説明付き）を披露させて頂いたことだ。

これに先立ち、全国大会事業部会では中屋晃部会長を中心に懇親会の出し物について話しあわれ、北大ジャズ研やよさこいソーランなどアトラクションの候補が出されたが、最後に北海道民謡の「江差追分」が選ばれた。正直言って、全体会議で「江差追分」が決まった時には嬉しい驚きだった。中屋部会長の尽力で、会場のサッポロファクトリーホールでは照明その他、準備万端整い、特に、音響機材は最高ランクのものが用意された。海外からの招待客も多数参加しており、以前、洞爺湖サミット用に作成した江差追分解説 DVD（英語版）の一部を江差追分会から使用許可を得て、唄の前に上映した。当時、私が所属していた民謡の会の師匠を始め、会員の皆様の協力もあり、司会者の新井良夫先生の進行の下、無事大役を果たすことができた。これも、ひとえに多くの方々のお力添えの賜物と今に至って感謝している。

その直後、カナダ人の教授が私の所に来て、感きわまった様子で「かもめの 鳴く音に ふと 目をさまし あれが 蝦夷地の 山かいな」の一部を「あれが カナダの 山かいな」と言い換えればどの国にでも通用するし、本当に共感の持てる唄だったと言ってくれた時の彼の顔は未だに忘れられない。この道の第 1 人者と言われる、江差町にお住まいの、青坂満師匠（昭和 43 年第 6 回江差追分全国大会優勝者）は「江差追分」について、「人間と言

うのは常に空想、『念』というのをもつとる。その思いをグーとくる波に乗せると両方がマッチするから合うのではないかと思う」と語ってくれた。「江差追分」は洋の東西を問わず、聞く人の胸を打つものだと思った。

一般的に民謡といえば、酒の席において手拍子や、三味線、尺八、太鼓などの和楽器で賑やかに唄われるもので、西洋音楽などに比べ、レベルの低いものとの認識が持たれているようだが、民謡の歴史から考えると、決してそのような娯楽本意だけでは無い。そこに住む人間の精神の支えとなり、文化として継承されてきたものだと私は考える。

文化とは一つに、あるグループ集団によって共有される価値観、世界観である。以前、小樽商大の言語センター広報（第16号）「異文化コミュニケーション研究の英語教育への取り組み（2）」でも述べたが、日本語の7, 5調のリズムは日本人にとって心地よいリズムとして受け入れられる。それに加え、自然との調和を尊ぶ文化は我々が共通して持っている世界観ではなかろうか。江差追分の哀調をおびたメロディーは人々の心に何かを訴えていると思われる。

専任教で異文化コミュニケーションをテーマにゼミナールや授業を教えているが、「異文化を知るには、まず、自文化を知れ」と言う言葉がある。私も同感だ。文化を知るにはいろんな方面からの切り口があると思うが、私にとって民謡は自分の心の故郷のように感じる。今は、JACETの全国大会で「江差追分」を披露する機会が与えられ、皆様に聞いて頂いたことに感謝している。